

日本人名 大事典

❧ 1 ❧

ア—オ

平凡社

日本人名大事典（新撰大人名辭典） 第一卷

一九三七年 五月一日 初版第一刷発行

一九七九年 七月一〇日 覆刻版第一刷発行

編集兼
発行者 下中邦彦

発行所 株式会社 平凡社

東京都千代田区四番町四番地

郵便番号 一〇二一

振替 東京八一二九六三九番

電話 東京（〇三）二六五一〇四五（代表）

製版・印刷 株式会社 東京印書館

本文用紙 大王製紙株式会社

表紙クロース ダイニツク株式会社

東洋クロス株式会社

製本 和田製本工業株式会社

日 本 人 名 大 事 典

第
一
卷

『日本人名大事典』の刊行に際して

ちょうど五年前、小社は創業六十周年記念出版として『大辭典』（覆刻版）全二巻を刊行いたしました。その元版全二十六巻が完成したのが一九三六年（昭和十一年）十一月のことであります。引続き翌年の五月から一九四一年の十月にかけて、『新撰大人名辭典』全八巻、索引一巻を出版いたしました。田口鼎軒の「大日本人名辭書」以来絶えてなかった大型の人名辭典であり、『大百科事典』『大辭典』を出版した平凡社ならではの企画として推賞され、その豊富な採録人名と内容の高さ、検索の便などによって大いに重宝がられたものであります。

『新撰大人名辭典』は一九五三年（昭和二十八年）から五五年にかけて、その後の物故者人名を組入れ、増補改訂を施した新版『大人名事典』全十巻として、また一九五七年には縮刷合冊版『大人名事典』全六冊として再刊いたしました。以来四半世紀近くを経過し、また絶版となってから久しいものがあります。特に日本の歴史的人名およそ五万人を収めた本巻六冊は、他に例を見ない大出版であり、また今日では入手困難な書籍の一つとなっております。

この度、小社では『新撰大人名辭典』の本巻六冊のほぼ完全な覆刻版に、増補

版一冊を加え、『日本人名大事典』全七巻として刊行することといたしました。

増補版一冊は、一九三八年（昭和十三年）九月以降、一九七八年（昭和五十三年）八月末日まで、ちょうど四十年の間に物故された方々の中からほぼ六千名を選んで収録し、一冊の人名事典として独自に編集したものであります。覆刻版六冊の補巻ではありますが、「当用漢字」「現代かなづかい」による簡明な口語文を用い、短い記述ながら資料的には豊富な内容を期したものであります。

この四十年間は第二次世界大戦という混乱期をはさんだ困難な時代ではありませんが、小社では百科事典をはじめ、幾多の事典類の編纂と出版の積重ねの上に、十数年来物故者人名の調査と整理を継続し、準備を重ねて参りました。今回、分野別に五人の編集委員を中心とし、六百名を超える執筆者を煩わし、採録人名の選定、執筆に当たっていただきました。

また編集製作の実務は平凡社教育産業センターに委託し、組版と配列は東京印書館が近年独自に開発したアイエス・ハナマチック全自動電算写植を全面的に活用し、斬新な印刷技術を駆使して、製作したものであります。

『日本人名大事典』を世に送るに当って、『新撰大人名辞典』『大人名事典』の刊行に携わった諸先輩、増補版の編集執筆に御協力をいただいた諸先生をはじめ、この間数々の御助言や御教示を賜った方々に厚く感謝の意を表する次第であります。

す。『日本人名大事典』全七巻が、広く読者諸賢に迎えられ、座右の伴侶となることを深く期待してやみません。

一九七九年七月

平凡社社長 下 中 邦 彦

覆刻版六冊について

一、巻別けは『新撰大人名辭典』に準じた。すなわち、第一巻アーオ、第二巻カ
ーコ、第三巻サータオ、第四巻タカーナ、第五巻ニーマツ、第六巻マテーワで
ある。

二、第六巻末尾の補遺項目は、それぞれの見出しに従って各巻中に配列し組入れ
た。

三、朝鮮・台湾の人名は削除した。

四、送り項目はすべて送り先を点検し、不明のものは削除した。

五、二様、三様の呼び方、読み方が慣用となっている人名については新たに若干
の送り項目を追補した。

六、一九三八年（昭和十三年）八月末日以前の物故者で収録漏れとなっている人
名のうち、特に重要と考えられる若干名を追補した。

七、生没年その他の皇紀は西紀に改めた。

八、*の符号による参照はすべて削除し、必要と思われるものは↓の符号による
送り項目とした。

九、同一人物は原則として一項目の記述に帰一するように改めた。

一〇、芸名項目のうち、初名、前名、後名、別名、俳名などを見出しとする記述は原則として削除し、送り項目とした。

一一、特に著名な人物の読み方のうち、現在の慣用と著しく異なるものは、一般に通用する読み方に改めた。

一二、本文記述中の誤植、脱字、不適當と思われる辞句用語などは訂正した。

新撰大人名辭典を世に送る

完備した人名辭書の出版は年來各方面の切なる要求であり、私もまたはやくから、よき人名辭書を撰りたいと考へてゐた。ところで、人名辭書の理想的なものを撰るには、第一に、採録すべき人物選擇が困難であり、第二に選擇したる人物各の格付けが困難であり、第三にはその傳記の實質内容を正確に表現することがまた容易でない。

そこで私は、理想的な人名辭書を撰るには、どうしても、専門家の専門的研究を綜合する外に途がないと考へ、

第一、重要なと思はれる人物を洩れなく各方面の専門家に拾つて貰ふ。

第二、拾つた人物を部門別に専門大家を煩して検討審査して貰ふ―採否の決定、採録洩れの補充、採録人物の格付け、執筆者の選定等。

第三、採録と決した人物につき、一定の規格に基いてそれぞれその部門の精通者に執筆

を煩はす。

第四、一流人物は、たとひ専門家であつても筆者自身が位まけするやうでは眞面目を傳へ得ない、この人をこの人が書いてこそといふ風に、大人物は特に大人物を煩はして執筆して貰ふ。

第五、大人物にはその風采を髣髴せしむるために肖像なり筆蹟なりを挿入する。

先づこれだけの方針を定めて編纂の仕事を進めた。

幸に、大百科事典、大辭典等の關係で、それぞれ専門的諸權威が熱心に賛同され、何くれとなく指導して下され、忙しい中を特に本辭典のために一流の諸大家が自ら進んで執筆して下されたことは、出版者の光榮であるばかりでなく、學界教育界乃至は一般社會にとつてもまた非常に仕合せなことである。

さらに、現存人物約五千人をも物故人物の中に加へて五十音順に排列する意見もあつたが、評價の定まらぬ人々を、一般物故者の中に加へることは、色々の點で不都合を生ずるので、これは別卷に扱ふことにした。かうしておけば、この部分だけを改版し、今後、物

故して行く人々を本巻の補遺とすれば、小部分の改版で、いつも新しくて便利である。

なほ、國際日本としての今日、外國の重要人物の傳記の概要をも併せ知る必要があると思ひ、約五千人をやはりこれも別巻の中に採録することとした。これは、歐米人ばかりでなく、印度、支那、滿洲その他有色諸民族中の重要人物をも網羅するのであるから、數は多くないが、日常の必要を満たすには頗る便利だと考へる。

全然瑕瑾がないとは言ひ得ないが、日本の人名辭書としては、先づ、以て理想に近い標準的な人名辭書が出来たと信ずる。大方の御力添へによつて、この新撰大人名辭典を茲に世に送り得るに至つたことは、私の年來の宿願を達した喜びはいふまでもなく、先輩諸氏の御慇懃御協助にも報いることとなつて、出版者としてまことに感謝感激に堪へない次第である。

昭和十二年五月

平凡社長

下 中 彌 三 郎

凡 例

一、企畫及び編纂上の用意

一、全八巻中、第一巻より第六巻に至る六冊に、本邦物故者五萬人を收録し、第七巻第八巻の二冊に、本邦現存人物約五千人、諸外國の物故現存人物約五千人を收録し、最終巻の後半に漢字索引及び家名別名雅號通稱等あらゆる角度から檢索し得るやう完備したる索引を附した。

二、本書の編纂は、在來の成書拔萃の方法を避け、全く新しい立場において科學的編纂方法を採用した。

1、重要なる史上の人物は部門部門において嚴密なる検討下に採否を決した。

2、専門諸大家の指導下に、人物を格付けし、その地位に従つて説明の長短を定めた。

3、一定の規格に基き、部門別に専門諸家精通者を煩はして執筆して貰つた。

4、出來上つた原稿を更に編纂本部に於て精査し整理統一した。

5、大物扱ひすべき人物を毎巻約三百を拾ひ、これには肖像筆蹟等を挿入した。

三、現存人物に就ては一定の基準を定めて豫選を行ひ、審査會を開いて採否を決定し、傳記の説明は、黨せず偏せず、専ら事歴を正確に傳ふるを本領とした。

四、説明はその責任を明かにすべく記事の終りに執筆者名を署し、且つ参考書を併せ記して典據を明かにし、一般研究家の便に供した。

五、第一流の人物は筆者自身が位まけするやうでは十分その人の眞面目を傳へ得ない。本書は此の點特に注意し、「この人をこの人が書いてこそ」といふ風に最も適切なる筆者を求めて書いて貰つた。

二、解説表現の諸形式

一、人名は原則として姓名を見出し項目とし、これを表音式片假名で示し、次に正確なる漢字を掲げ、これに歴史的假名遣による振假名を附した。

二、年紀はすべて皇紀を用ひた。

三、天皇・皇后・皇太后はその諡を奉掲した。

四、皇族はその御名を用ひた。但し皇后・中宮・女御・内親王にして門院號の宣下あるものは何々門院として奉掲した。

五、學者・文人等にして別號の著名なるものは、姓と號とを以て見出し項目とした。例へば、青木昆陽・新井白石の如くである。

六、著作家・畫家・俳人・工人・茶人など、特に號を以て著名なるものは、號のみを以て一項目を表はし、その姓號の別項目において本文を記した。

七、著名なる別名を有し、それが全く別人の如く見なされるおそれあるものは、例へば大田南畝〓蜀山人〓四方赤良の如くし、その見出しを各項目に掲出し、いづれも大田南畝の下に記述を歸一せしめるやうにした。

八、僧侶は主として名を以て見出しとした。但、著名なるは、號を以てし或ひは號と名とを併記した。

九、俳優・力士・音曲家などはその著名なる藝名を見出しとした。

一〇、同一名で數代繼承する場合は、その項目の最初に全數代にわたる概括的説明を記し、次に、初代二代など各人別に列記した。

一一、婦人の姓の詳かならざるものは、單に名を記し、名の詳かならざるものは、見出しに父または夫の姓をとり、何某の女、若しくは何某の妻とした。

一二、假作人物即ち傳説中の人物、戯曲中の人物の如きは特に引離して之を別卷に收録した。

一三、氏は概ねその姓氏の初めに掲げて、家系の異同を明かにした。

一四、物故人物氏名の下には、皇紀を以て生歿年を記し、その未詳なるものは、次例の如くにした。

生年未詳の場合 (——二四二五)

歿年未詳の場合 (二二六八——)

一五、生歿年月に異説あるものは、本文中にこれを掲げた。

三、排列と符號

- 一、人名の見出しはゴチック體表音式片假名を以て五十音順に排列した。
- 二、排列の順序は一字長音を先とし、二字短音これにつづき、濁音をその次位とした。
- 三、何々の項を見よの意味には↓の符號を用ひ、何々の項を参照せよの意味には*の符號を用ひた。
- 四、同一漢字にして二様以上に讀まれる氏名は、正しき讀方にて見出しを附し、文中において一般稱呼をも示した。

以上

ア

アイオイゴエモン

相生五右衛門 (二六
六一七五)

徳川中期の力士。郷黨では「一本」の俗稱で知られる。延寶八年、阿波麻植郡川田村の庄屋五郎の子に生れ、初名を宗徳といふ。幼少より體格雄偉、身長六尺に達した。十九歳のとき徳島よりの歸途、名東郡府中村印鑰明神の夜角力に飛入り、初めて「一本」と名乗をあげて勝ちつづけ、また二十一歳のとき讃岐金毘羅の勸進角力に連勝、大關相引森右衛門に認められてその弟子となり、相生五右衛門と名乗つた。二十三歳のとき讃岐金毘羅の勸進角力に東の關脇となり、時の大關大森次郎右衛門を破つてその怪力を誼はれ、紀州侯に招かれたが應ぜず、「朝顔や百日紅は恥多し」の一句を高越權現に奉納し、まもなく稼業をやめ、次五右衛門と改名した。寶曆五年歿、年七十六。(麻植郡誌)

アイオイシタロー

相生由太郎 (二
六七一九)

明治から昭和初期にかけての實業家。慶應三年四月二十八日、福岡市西町魚屋相生久治の長男に生る。初め正木昌陽の漢學塾に入り、のち舊藩主黒田侯の貸費生として東京高等商業學校に學ぶ。明治二十九年、日本郵船會社社員を振り出しに、實業界に志し、三井鐵山合名會社に移り、

アイオ アイサ



相生由太郎

更に三井物産門司支店に轉じ、たまたま明治三十八年七月、石炭人夫の間に勃發した賃銀値上罷業の解決に當り、請負業者を設き伏せ、二千の労働者を直營とし、その才幹力量を認められた。明治四十年滿鐵理事犬塚信太郎の招請により赴任し、滿鐵囑託として、大連埠頭整理を委任され、仲仕組、運送組を擧げて滿鐵直營とした。また總裁後藤新平と談じて救済組合、圖書館などの設備を整へ、滿洲特產取引所と重要物產輸出商組合の設立に盡力し、明治四十二年滿

鐵を辭し、大連山縣通に福昌公司を開設、八千人の苦力を使つて大連埠頭の船舶貨車貨物の積卸荷役請負の事業に携はつた。一方、大連における公人としても重きをなし、滿洲重要物產同業組合の副組合長、滿洲水産會社取締役、大連商工信託會社取締役、大連商業會議所會頭、大連市會官選議員、滿蒙興業株式會社取締役、その他各種の事業に關係し、大正十三年、實業界の勳功者として正六位に叙せられ、昭和四年御大典に際し勳六等瑞寶章を授けられた。昭和五年正月三日歿、年六十四。(黒岩)

アイカワカゲミ

相川景見 (二二一
一七五)

徳川末期、明治初期の國學者。文化八年に生る。初め登之助、のち彦之進、

定泰、如茂といひ、景見と改め、柏園また山の井と號す。國學を香川景樹に學び、上野宮に和歌を講讀。文政八年進仕。文久三年江戸幕府に御徒組頭を、慶應二年小普請をつとめ、明治元年致仕して隱居す。明治八年二月十七日歿、年六十五。墓所、東京谷中、正行院。その著に、柏園家集、百異拾解、宇都勢美の日記、船路の日記などがある。(窪田)

アイカワトキハル

淡河時治 (一三三
六一七五)

鎌倉時代の武將。六波羅探題北條(佐介)時盛の子。右京進と稱す。元弘三年後醍醐天皇、北條高時を追討せしめ給ふに當り、越前に下り大野郡牛原の地頭となる。五月八日六波羅敗るるにおよび、その部下の士卒多く逃散す。同十二年平泉寺の僧徒七千餘來つて牛原を圍む。時治、防戦の術なく、妻子訣別し二兒を水に投じ、自らは割腹して果てた。(太平記 大日本史 橋本)

アイカワミツシ

合川珉和 徳川中期の畫家。名は秀成、字は士陳、雪山と號す。京都の人。文政二年刊行の『扁額軌範』を北川春成と共に著はし、また漫畫百女を描いた。(扁額軌範)

アイカワヨシタケ

相川義武 (一六三
六一七五)

徳川初期の切支丹武將。相川勘解由左衛門尉藤原義武といふ。平原相川氏一族の祖先。元甲州武士、のち大村侯に仕へ、文祿の役に一方の旗頭として出征。肥前西彼杵郡形上に居をとし、今の龜岳村平原には二代目藤兵衛より移住す。全郷すべて相川姓、義武の末裔のみにて潛伏切支丹聚落を形成した。村の一角に花十字と歐文を刻せる切支

丹墓碑が建ち、子孫の相川姓二十一人と俱に、元祖義武の名を留め、「慶長十八年七月朔日去、松翁院練心日充居士」とある。切支丹禁教の折、藩主大村侯の改宗に従ひ日蓮宗の戒名としたもの。(黒岩)

アイケイマサモト

愛敬正元 (二六三
六一七五)

幕末の志士。肥後熊本の祠堂。通稱左治馬。學を熊本藩儒林有通に受く。明治九年敬神黨に加はり、敗れて筑前三國峠に自刃す。年四十六。(殉難十六志士略傳)

アイケイモトヨシ

愛敬元吉 (二六八
六一七五)

明治初期の志士。正元の男、通稱吉太郎。加屋齋堅に國典を學ぶ。明治九年父と共に敬神黨に參じ、敗れて自殺す。年十七。(西南記傳)

アイコカネサト

愛甲兼達 (二六二
六一七五)

明治、大正時代の實業家。文久二年十一月鹿兒島藩士津田傳助の長子に生れ、のち愛甲氏を繼ぐ。浪速銀行、勤儉貯蓄銀行、南島拓殖製糖の各取締役を兼ね、十五銀行常務取締役より頭取となる。その他鹿兒島電氣軌道、大洋商船、大隅鐵道、日本海運工業、日本農産工業、日本水電、東印拓殖、薩摩製絲、羊毛製絲の取締役、鹿兒島紡績、金華紡績、大和ゴム工業等の監査役に推された。昭和三年十月十七日鹿兒島に病歿す。年六十七。

アイサワイタユ

鮎澤伊太夫 (二四
六一七五)

幕末明治初期の志士。文政七年水戸藩士高橋諸往の二男に生る。志士高橋多一郎の弟、名は國維、字は廉夫。文武に秀で、弘道館舎長に擧げらる。弘化年間、前藩主齊昭の幽閉を解かんとして、その雪